

現実との折り合いの付け方を身に付ける 総合的な学習の時間の在り方についての研究 ～ふるさとを「食」に関するプロジェクトで盛り上げていくために～

藤上 真弓

Learning the Gap between Desires and Reality through a Project in the Period of Integrated Study:
Raising awareness of hometown through a project on food

FUJIKAMI Mayumi
(Received January 6, 2016)

キーワード：総合的な学習の時間、プロジェクト学習、現実との折り合いの付け方、見える化

はじめに

社会や他者に対して何らかのプロジェクトや提案を行う際には、エゴに陥っていないかどうか、自分たちの活動について見つめる視点や方法等をもっているかどうか、成功の鍵を握る。総合的な学習の時間において、子どもたちの追求が深まれば深まるほど、課題に対する「思いや願い」が強固になり、自分や自分たちの活動や価値観等を社会や他者に対して押しつけてしまいがちになる。そのような状況にならないためにも、自分や自分たちの提案する内容や方法等が、現実社会に対応できるようなものになっているかどうか見つけ直す場が必要になってくる。そこで、子どもたちが、「現実」を把握したり、「現実」を乗り越える方法を模索したりせざるを得なくなる手立てを行う必要があると考える。

総合的な学習の時間は、自分の「思いや願い」と「現実」との折り合いの付け方について学ぶ時間だと、筆者は考える。子どもたちは、多様な分析の視点や方法等を得て、自分や自分たちがもっている情報を吟味し、折り合いを付けた後には、「～する」という「意志」が表現された「自分なりの応え」「自分たちなりの応え」を導き出すことができる。「意志」が表現された「応え」は、子どもたちが歩んでいく道筋を照らし出す。子どもたちは、総合的な学習の時間の学びの中で、自分や社会の未来を切り拓いていく術を身に付けていくのである。

1. 研究の目的と方法

子どもが、「現実」との折り合いの付け方を身に付けていく授業デザインや場の工夫について、明らかにできるようにした。プロジェクト的な学びを展開できるようにし、その中で、特に以下の2点の工夫を行っていくことにした。

- 子ども一人ひとりの思考・判断の様相を「見える化」する授業デザインの工夫
- 「思いや願い」と「現実」の折り合いを付けるための視点や方法等を意識させる場の工夫

1-1 子ども一人ひとりの思考・判断の様相を「見える化」する授業デザインの工夫

子どもが思考し、判断した様相が顕在化する言語活動を設定し、子どもが表現したもから課題解決のために必要な知識・技能等を見取り、語り合いの深化・活性化を図ったり、価値付けを行ったりする等、適切な手立てを行っていくことにした。そして、振り返りの場で、子どもが、自分の思考の流れや判断の決め手、課題解決に有効だった知識・技能等、最終的に見いだした考え等を自覚しながら、学びの成果や知識・技能

等を活用するよさを実感できるようにした。

1-2 「思いや願い」と「現実」の折り合いを付けるための視点や方法等を意識させる場の工夫

まず、追求の原動力ともなるプロジェクトの達成に向けての自分や自分たちの「思いや願い」を、子どもが自覚する場を設定する。そして、適宜、子どもたちが、把握し、乗り越えていかねばならない「現実」と向き合わざるを得ない場を設定する。そうすることで、自分たちが計画したプロジェクトの目的を見つめたり、それらと、行おうとしている内容や方法との整合性をとっていったりすることができるようにした。

2. 単元「『食』でつながる公集・味なプロジェクト」（第5学年）について

2-1 単元のねらい

本単元は、地域の人と共に行う米作り体験や「食」に携わる人々との出会いをきっかけとして、人々の生き様や「食」に対する思いや願い、見方・考え方にふれる中で、地域の食文化や「食」と人とのかかわり方を見つめ直していくことをねらった。

2-2 めあて

表1は、筆者の勤務校¹⁾が総合的な学習の時間の時間で身に付けたいと考えた4つの力に応じて設定した本単元のめあてである。

表1 本単元のめあて

課題を見付ける力	「食」について気がかりなことや興味をもったこと、魅力を感じた「食」に携わる人々の「食」に対する思いや願い、見方・考え方について、進んで調べることができる。
追求する力	「食」に携わる人々や仲間とかがわりながら、「食」と人、「食」と地域や地球環境などの関係などについて調べることができる。
表現する力	追求して得たデータを整理したり、「食」に携わる人々や自分の「食」に対する見方・考え方が顕著に現れた事例を選んだりしながら、仲間や他者に納得してもらえ伝える伝え方を模索することができる。
創造する力	人々の「食」に対する見方・考え方をもとに、未来の「食」の在り方を見据えながら、今後の自分の生活の在り方を見いだすことができる。

2-3 主な単元の流れ

表2は、本単元の主な流れである。「食」に携わる人々の根底に流れる思いや願い、見方・考え方に迫りつつ、自分たちなりのプロジェクトを展開していくことができる流れにした。

表2 本単元の主な流れ

過程	主な活動
出会い	○今の時点での自分の「食」に対する思いや願い、見方・考え方について自覚する ○田植え、稲刈り、脱穀体験をする
課題設定	○予想としての「『食』とは、ズバリ！□である」を導き出す
課題追求	公集・味なプロジェクトⅠ 「ごはん・もち+地域食材DEプロジェクト」 <小単元Ⅰ>○もち米づくりに携わる人々の「食」に対する思いや願い、見方・考え方に迫る <小単元Ⅱ>○野菜に携わる人々の「食」に対する思いや願い、見方・考え方に迫る <小単元Ⅲ>○給食に携わる人々の「食」に対する思いや願い、見方・考え方に迫る <小単元ⅠⅡⅢのまとめ>○「食」に携わる人々の根底に流れる思いや願い、見方・考え方を導き出す ○「ごはん・もち+地域食材DEプロジェクト」の活動や内容を決定する
まとめ	公集・味なプロジェクトⅡ 「『食』に提案」 ○感謝祭や様々な場面で「食」に提案する ○「『食』DE笑顔〇ヶ条」を完成させる

2-4 授業の実際と考察

この研究では、3つ授業場面における手立てとその効果について分析する。

2-4-1 ホウレンソウ農家のKさんの「食」に対する思いや願い、見方・考え方に迫る

(1) 本時の主眼

以下のような主眼で、授業公開（2年次フォローアップ研修）を行った。

「Kさんを支える存在はズバリ！□である」という「自分なりの応え」をもとに、「食」に携わる人を支える存在について語り合う活動を通して、「食」に携わったり、働いたりする際に必要な見方・考え方を見いだすことができる。

(2) 授業デザインの各過程における教師の手立てと子どもの姿

授業デザインの各過程における教師の発問や子どもの語り合いの様相と、それらの分析について述べる。

図1は、課題把握の過程における発問や子どもの基調提案等である。


<p>発問1 ホウレンソウ農家のKさんは、どのような存在に支えられていると考えましたか。</p>		<p>基調提案2</p>
<p>基調提案1</p> <p>★消費者からの反応</p> <p>ぼくは、消費者から、心から「おいしい」と言われるとKさんもパワーが増え、Kさんを支える柱となると考えました。Kさんは、たくさんの人に支えられています。</p> <p>A児</p>	<p>★社会に貢献するという使命感</p> <p>Kさんは、自給率が低いから、農家に転職したとおっしゃっていたので、今の日本の食の在り方をよい方向にもっていきたいという使命感に支えられていると、私は考えました。そして、Kさんは、地域の「食」を支えていると、私は考えます。</p> <p>B児</p>	

図1 課題把握の過程における発問や子どもの基調提案等

子どもたちに、「自分・家族・農家・JA・運送業者・消費者」という6つの学びの立場を提示し、自分の考えと関連するものを選択させ、自他の考えの共通点や相違点に着目できるようにした。そして、Kさんを支えているものは「消費者からの反応」と考えるA児に基調提案させ、他の子どもたちが、働く目的と働くことによってもたらされる気持ちとの関係に着目できるようにした。また、「自給率の向上に貢献したいという使命感」と考えるB児にも基調提案させ、やりがいのとらえ方の違いを浮き彫りにし、対立状況をつくり、語り合いを焦点化した。図2は、語り合い場面における教師の発問や子どもの語り合いの様相である。

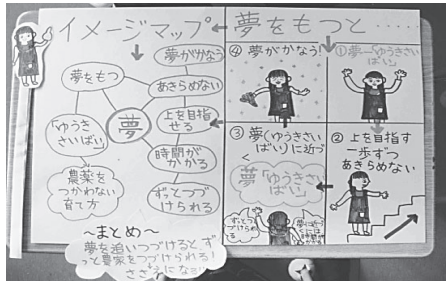
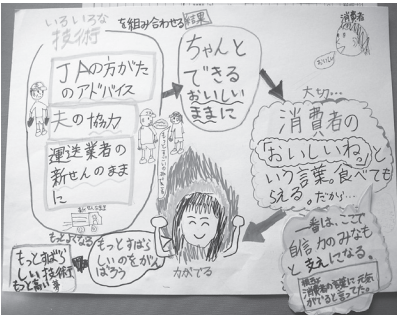
<p>発問2 Kさんが、ホウレンソウをつくるエネルギーをもち続けることができるのは、なぜでしょうか。</p>	
C児	ぼくは、消費者の「ありがとう」という声に励まされていると思います。Kさんは、消費者のことを思って、まるで子どものように育てているとおっしゃっていましたよね。
D児	だからこそ、私は、作っているホウレンソウに、Kさんは支えられているのではないかと考えます。名前入りの自信作が店に並ぶのは、私は誇らしいのではないかと思います。
E児	ぼくは、仕事の仲間だと思います。JAでも野菜を売っていると、Kさんはおっしゃっていましたよね。
F児	私は、おいしく安全なホウレンソウを提供したいという農家としての誇りだと考えます。そう考える理由は、「食」に携わる人は、「安全」を基本に考えているということに気付いたからです。
G児	ぼくは、一緒に働くだんなさんだと思います。ぼくたちの給食の食材になる際には、子どもたちが野菜嫌いにならないように、野菜の運び方や運ぶタイミングを考えているとおっしゃっていましたよね。いくら、Kさんが安全で、新鮮で、おいしいホウレンソウを作ったとしても、運ぶ人がホウレンソウをどのように取り扱うかで、Kさんの思いや願いが届かない場合もあると考えるからです。
<p>発問3 困難に出会った時に、どうすれば未来を切り拓いていくことができそうですか。</p>	
<p>ぼくは、さっきE児さんも言ったように、困った時こそ、頼れる組織がないと、個人での営業だと仕事ができなくなる場合があるのではないかと思います。</p> <p>H児</p>	
<p>私は、いつも自分の夢があるから、どんなことがあっても頑張ることができるのではないかと思います。みなさん、私が考えたこの因果関係の図を見て下さい。(説明略。右の表現物を活用して自分の考えを説明。)</p> <p>I児</p>	<p>ぼくは、たくさんの技術を身に付けたり、働く仲間や組織から技術を提供されたりするからこそ、もっと頑張ろうというエネルギーとなる消費者の反応をもらえるのだと思います。自分が一生懸命育てた野菜に対して、プラスの言葉をもらおうと、それは大きな自信になると思います。この自信が、エネルギーの源だし、自分の支えになると、ぼくは、思います。そして、「もっとすばらしいものをつくらう」「もっとすばらしい技術を身に付けよう」などというように、高い夢をもつことができます。そうすると、プラスの因果関係のサイクルが回っていきますよね。(左の表現物を活用して自分の考えを説明。)</p>
	

図2 語り合い場面における教師の発問や子どもの語り合いの様相

語り合いでは、学びの立場の限定を促す投げ掛けを行うことで、因果関係のスタートであるKさんの夢や「食」に対する「思いや願い」に着目して語り合うことができるようにした。また、図2では割愛しているが、抽象的な言葉のみで自分の見方・考え方を説明した場合には、収集した事実や事実から分かったこと等

と絡め、具体的に語らせた。そのため、I児や児J児のように、必要な表現物をあらかじめ作成していた子どもも多くいた。I児の発言を見ると、「現実」を乗り越えていくためには、強い「思いや願い」が原動力になっているという考えをもったことが分かる。H児の発言を見ると、I児とは考えが異なり、「現実」を乗り越えるためには、個人ではなく、組織的な「現実」の乗り越え方に目が向いていることが分かる。J児の発言を見ると、多様な立場の人々から多くの技術を学んだり、提供してもらったりすることによって生まれた野菜への「おいしい」という評価が自信につながり、さらに技術に磨きをかけたいという「思いや願い」を生み出していくという考えをもったことが分かる。

図3は、振り返りの過程における教師の発問と、振り返りカードへの子どもの記述である。振り返りカードには、本時に最終的に至ったKさんを支える存在に対する「自分なりの応え」とその根拠を記述させ、自分が得た見方・考え方や新たに抱えた課題に気付くことができるようにした。

発問4 プラスのつながりを生み出すためには、何が必要だと考えましたか。	
J児	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分なりの応え」は変わった。Kさんを支えているものは、夢。 <理由>①夢は、前に進む原動力。 ②困ったことが起こったら、夢を見つめてみたらよい。そうすれば、何がしたいのか見えてくる。
K児	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分なりの応え」は変わらなかった。Kさんを支えているものは、消費者。 <理由>①Kさんは、買ってもらえているか心配で、店にまで行っていらっしやった。買ってもらえるものを作らないと、生活が成り立たない。 ②自分の夢と消費者の思いや願いとの折り合いを付けたり、技術を身に付けたりすることが必要。

図3 振り返りの過程における教師の発問と子どもの振り返りカードへの記述の抜粋

(3) 本時の成果と課題

本時では、子どもは、思考・判断の様相を「見える化」するために、追求で得た具体例を挙げたり、図を提示したりするなど、自分なりの表現内容や方法を用いて、語り合いを深化・活性化していくことができた。

また、「食」に携わるKさんが、自分の「思いや願い」と置かれた「現実」とどのように向き合っているのか、働く原動力を得ているもの等について語り合うことで、夢をもつことや「現実」との折り合いの付け方に対する「自分なりの応え」をもつことができた。そして、生半可な「思いや願い」で、「食」にかかわる提案を行ってはいけないことに気付いていった。

2-4-2 「ふるさと給食」を企画する上で大切にすべきことについて吟味する

(1) 本時の主眼

以下のような主眼で、授業公開（2年次フォローアップ研修、下松市研究所員集会）を行った。

「ふるさと給食」を企画する上で大切にすべきことについて語り合う活動を通して、給食に携わる人々が「ふるさと給食」に込めた思いや願い、見方・考え方に気付くことができる。

(2) 授業デザインの各過程における教師の手立てと子どもの姿

授業デザインの各過程における教師の発問や子どもの語り合いの様相と、それらの分析について述べる。

図4は、課題把握の過程における発問や子どもの考え等である。

発問1 「公集ふるさと給食」を企画する上で大切にしなければならないポイントを3つ以内で選びましょう。

班	キーワード1	キーワード2	キーワード3
1	下松市産	旬と栄養バランス	安全
2	産地	安全	
3	下松市産	栄養	新鮮さ
4	下松市産	安全	新鮮さ
5	安全	下松市産	新鮮さ・旬
6	新鮮さ	賞味期限	値段

私たちの班は、「下松市産」、「安全」、「新鮮さ」だと考えたよね。

安全
安全な食材じゃないと食べられない

基調提案1

対立している意見をもつ班を意図的に指名し、議論する方向性を共有できるようにする。

基調提案2


下松市産
安全は、当たり前のこと。ふるさと給食ならではが必要

図4 課題把握の過程における発問や子どもの考え等

ここでは、6つの班それぞれに、大切にしたいポイントを3つ以内のキーワードに整理させ、発表させた。そして、対立している考えをもつ2つ班を選んで意図的に指名し、語り合いの方向性を焦点化した。

図5は、語り合いの前半部における教師の手立てや子どもの発言等である。子どもたちは、特別給食を企画する上で必要な内容や視点、方法を吟味していった。教師は、「いつも」と「特別」の違いを明確に意識させるために、学校栄養職員と調理員の服装や活動の違いをとらえることができる資料を提示した。

私は、やはり、「ふるさと」と付いているのだから、学校栄養職員さんたちは、下松の特産物について知ってほしいという思いや願いをもって献立を考えていらっしゃると思います。



でも、ぼくは、食べることにすることで安心感を生むのは、「安全かどうか」だと思います。その理由の1つめは、この前からニュースでも取り上げられていますが、食中毒になると、命まで奪うこともあるからです。2つめは、(略)。

発問2 ○さんたちは、「ふるさと給食」の日は特別な日だと考えたのですね。それでは、調理員さんと学校栄養職員の先生の姿を写した画像を「いつもの給食の日」と「ふるさと給食」とで比較して、「ふるさと給食」について見つめ直すと、どんな違いがありますか。




ぼくは、調理員さんや学校栄養職員の先生は、ぼくたちに下松市や山口県の食材を知ってほしいという思いや願いがあるから、このような特別な給食を企画してくださっているのだと思います。わざわざ、野菜の格好で教室も巡ってくださっているし。

「安心」が、「食」の第1条件であるという意見に、私も賛成なのです。しかし、給食で「安心」は当たり前のことだと思います。校長先生は、毎日検食をされているそうだし、調理員さんたちも、食材や食器を洗う時や、調理をする時などには衛生面にとっても気を付けられているそうですよ。



みなさん、「地産地消」という言葉を聞いたことがありますか。「安全」の心配をまだしている人がいますが、「地産地消」は、安心・安全にもつながるのですよ。学校栄養職員の先生が、このような写真を給食室の前に掲示してくだっているのも、そのためです。



実際のところ、何を大切にされているのだろうか。

図5 課題解決場面における教師の手立てや子どもの語り合いの様相

図5の「実際のところ、何を大切にされているのだろうか」という発言からも分かるように、子どもたちは、自分たちだけで語り合っても解決できないことに気付いていった。そこで、子どもたちの必要感をもとに、学校栄養職員にゲストティーチャーとしてアドバイスをもらう場を設定し、課題解決のために必要な内容や視点、方法を学級全体で共有できるようにした。表3は、学校栄養職員のアドバイスをまとめたものである。

表3 学校栄養士が「ふるさと給食」を企画する際に大切にしている気持ち、考え

「ふるさと給食」を企画する時には、食べる人に次のような気持ち、考えをもってほしいと思っています。

- ☆地元でとれる産物を知り、郷土を愛する気持ちをもってほしい
- ☆食べ物や栄養、安全性について関心をもってほしい
- ☆生産者や食事にかかわる多くの人々、自然の恵みへの感謝の気持ちをもってほしい
- ☆地場産物を理解し、日常生活と関連付けて考えてほしい

そして、大切にしていることは、①山口県産、下松市産、②旬(新鮮)、③栄養バランスです。

図6は、振り返りの過程における教師の発問と活用した子どもの振り返りカードの記述である。

発問 今日みんなで語り合って、そして、学校栄養職員の貞弘先生のお話を聞いて、感じたこと、考えたこと、考えが変わったこと、自分が影響を受けた考えなど、理由を含めて、具体的に書きましょう。

「安全」は、基調提案をした○さんが言ったように、基本でした。他にも、値段やアイデアなど、私たちが考えていたことの全てを頭に入れながら企画されていることが分かりました。他の班が、「メニューの名前も大切」と言っていたけど、確かに名前1つで、おいしそうかどうかのイメージが変わってくるなと思いました。

「ふるさと給食」の日に、調理員さんや学校栄養職員の先生が、あんな格好をするのには、とても深い訳があったことを知りました。

- ・ふるさとを大切にほしい
- ・地元で取れた物を知ってほしい
- ・給食に携わる人々に感謝の気持ちをもってほしいという願いがあったのです。

ぼくは、学校栄養職員の貞弘先生のお考えを聞いて、びっくりしたことがあります。安全は「絶対」と言われた時までは、びっくりしませんでしたけど・・・。なんと！給食の食材は信頼している所以外のものは使わないそうです。ぼくは、「だから食中毒にならないのだ！」と納得できました。

しかし、ぼくは、納得いかないところがありました。それは、3つの中の1つ「旬」です。納得いかない理由は、「旬」の食材は人気があるので、手に入れようと思っても給食で出す量は大量なので、手に入りにくいのではないかと考えるからです。ぼくは、給食委員会なので、次に会った時に聞いてみようと思います。

予想が1個しか当たらず、ちょっとがくつとした気持ちもありますが、「『ふるさと給食』には、こんなにすごい工夫があるのだ。」というすごいことを知ったといううれしい気持ちもあります。ぼくは、「ふるさと給食」の日が、楽しみになりました。

図6 振り返りの過程における教師の発問と活用した子どもの振り返りのカードの記述

(3) 本時の成果

本時では、語り合う際に、自分や自分たちの考えを伝えるために必要であれば、表現物を準備させた。児童は、追求して得た事実を言葉だけでなく視覚にも訴えたり、ナンバリングしながら根拠を挙げたり、みんなが知っているものにたとえながら根拠をより具体的に説明したりするなど、多様な表現方法を用いながら準備や語り合うことができた。それらを価値付け、全体で共有する場を設定することで、次の語り合いの際に誰もが活用できるようになっていった。

また、語り合い後に、自分の変容を具体的に見つめる振り返りカードを用いたので、子どもは、自分が得た視点や考え、新たな疑問、学んだことと生活との関連等についても気付いていった。

2-4-3 「ふるさと雑煮献立」をプレゼンテーションし、ふさわしい案を吟味する

(1) ゴールにたどり着くまでの過程を具体的に考える手立て

図7は、自分の「思いや願い」が、相手に伝わるために必要な内容や方法について考える際に用いたワークシートである。これは、「ゴールへの道ワークシート」と名付けている。目的を再確認し、それを達成するために必要な内容や活動を絞り込むために有効な言語活動である。誰かに向けて何らかの提案をする際に、ただ単に知識を伝達するのではなく、「相手の見方・考え方、行動をどのように変えたいのか」ということを意識させることが重要だと考えた。

この単元では、班ごとに案についてプレゼンテーションをして、いくつかの案が採用されるという計画にしていた。そこで、班で語り合う場を設定し、図8のように、班のゴールへの道を表現させた。そうすることで、自分たちの班の目的とそれを達成するために必要な活動・内容を共有できるようにした。

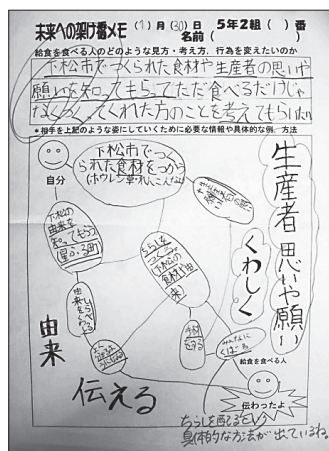


図7 「ゴールへの道ワークシート」

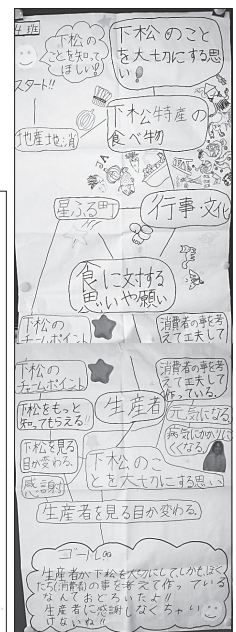


図8 班の「ゴールへの道」

(2) 本時の主眼

以下のような主眼で、授業公開（下松市立公集小学校内研修）を行った。

「ふるさと雑煮献立」にふさわしい案について、自分たちが考えた視点や目的と照らし合わせながら語り合う活動を通して、「ふるさと雑煮献立」を企画する際に必要な見方・考え方を見いだすことができる。

(3) 授業デザインの各過程における教師の手立てと子どもの姿

誰かに向けて、何らかの提案をしていく際に、自分や自分たちの考えを押し付けるのでは、相手に受け入れてもらえない。そこで、自分や自分たちの案を検討する場を適宜設定することが、プロジェクトを成功させるためには重要な場となってくる。その際、子どもたちの語り合いを深め、検討を意味や価値のあるものにしていくためには、検討・分析する視点を共有することが必要である。それとともに、「～の視点から分

析すると」というように、自分の分析の視点を明らかにさせた発言を意識させることが、語り合いを焦点化させるために必要である。分析の視点は、教師やゲストティーチャーが出す条件として与えることもあるが、自分たちが考えたプロジェクトにおいては、どのような視点からの分析が必要なのか、自分たちで見いだすことができるような場を設定することが必要であると考えた。自分たちが置かれた現実、つまり、乗り越えなくてはならない「現実」である壁を自分たちで意識するということである。それが、自分たちの「思いや願い」と置かれた「現実」との折り合いの付け方を身に付けることにつながっていくと考えた。

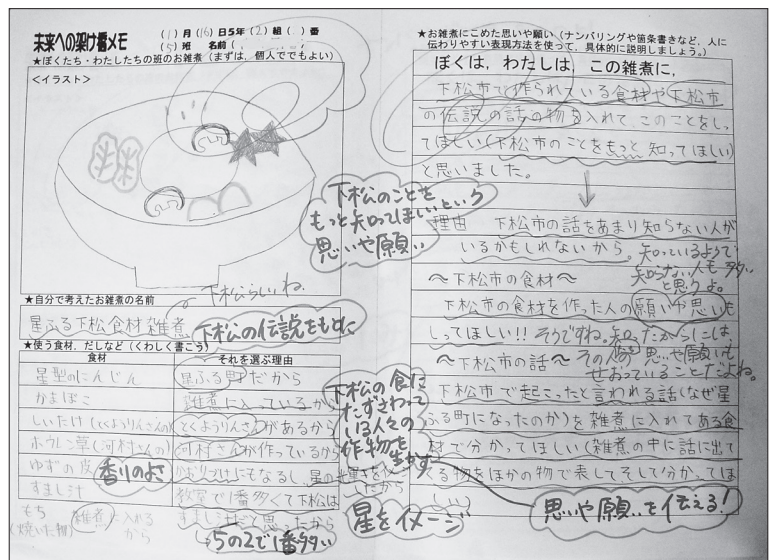


図9 案や込めた思いや願い等を記述したワークシート

授業デザインの各過程における教師の発問や子どもの語り合いの様相と、それらの分析について述べる。

図10は、課題把握の過程における教師の発問と子どもの発言である。

発問1 「ふるさと給食」で、大切にしなければならないことは何だったでしょうか。

「ふるさと給食」を企画する際に、学校栄養職員の貞弘先生が大切にされていることは、「下松らしさ」「旬」「栄養バランス」の3つでした。

ぼくたちは、その3つと、「下松の生産者の思いを伝える度」「食べる人を惹きつける度」も必要だと考えたのです。

図10 課題把握の過程における教師の発問と子どもの発言

ここでは、「ふるさと給食」を企画する上で、学校栄養職員が大切にしていることや、自分たちで考えた検討の視点を再確認させ、検討する方向性を把握できるようにした。

図11は、語り合う過程における教師の発問と子どもの語り合いの様相等である。

発問2 自分たちの班の「ふるさと雑煮献立」のコンセプトはどのようなものですか。

○班は、「下松らしさ」にこだわりました。食材は、全て下松産、または、下松市らしい形にしました。

△班は、「食べる人を引きつける度」を意識しました。「具がたくさん入って楽しい」「メニューの名前がおもしろいから食べてみたい」という気持ちになってほしいと考えました。

<p>3/6 公集味なプロジェクト (どの班の案が「下松ふるさと雑煮献立」にふさわしいか)</p> <p>星ふる町にふり給食 (牛乳)</p> <p>星ふる下松給食 (牛乳)</p> <p>下松オールスター (牛乳)</p> <p>下松キラキラ給食 (牛乳)</p> <p>星ふる町の味給食 (牛乳)</p> <p>下松の星ふる町給食 (牛乳)</p>	<p>こめた思いや願い(コンセプト)</p> <p>1 下松の食材を使いたい</p> <p>2 下松でしか売らない食材</p> <p>3 下松の味のある形の食材</p>	<p>こめた思いや願い(コンセプト)</p> <p>1 下松の味を伝える</p> <p>2 下松でしか売らない食材</p> <p>3 栄養たっぷり</p>	<p>こめた思いや願い(コンセプト)</p> <p>1 下松の味を知ってほしい</p> <p>2 地産地消</p> <p>3 楽しく笑顔で食べたい</p>	<p>こめた思いや願い(コンセプト)</p> <p>1 下松にならぬ由来</p> <p>2 下松で作られた食材</p> <p>3 食べる人に伝わりやすい</p>	<p>こめた思いや願い(コンセプト)</p> <p>1 野菜たくさん</p> <p>2 地産地消 楽しく食べたい</p> <p>3 下松の味を知ってほしい</p>
<p>① 下松産の食材</p> <p>② 生産者の思いや願いを伝える</p> <p>③ 食べる人を引きつける度</p> <p>④ 旬を意識</p> <p>⑤ 栄養バランスはわり度</p> <p>⑥ おいしくおいしく</p>	<p>① 下松産の食材</p> <p>② 生産者の思いや願いを伝える</p> <p>③ 食べる人を引きつける度</p> <p>④ 旬を意識</p> <p>⑤ 栄養バランスはわり度</p> <p>⑥ おいしくおいしく</p>	<p>① 下松産の食材</p> <p>② 生産者の思いや願いを伝える</p> <p>③ 食べる人を引きつける度</p> <p>④ 旬を意識</p> <p>⑤ 栄養バランスはわり度</p> <p>⑥ おいしくおいしく</p>	<p>① 下松産の食材</p> <p>② 生産者の思いや願いを伝える</p> <p>③ 食べる人を引きつける度</p> <p>④ 旬を意識</p> <p>⑤ 栄養バランスはわり度</p> <p>⑥ おいしくおいしく</p>	<p>① 下松産の食材</p> <p>② 生産者の思いや願いを伝える</p> <p>③ 食べる人を引きつける度</p> <p>④ 旬を意識</p> <p>⑤ 栄養バランスはわり度</p> <p>⑥ おいしくおいしく</p>	<p>① 下松産の食材</p> <p>② 生産者の思いや願いを伝える</p> <p>③ 食べる人を引きつける度</p> <p>④ 旬を意識</p> <p>⑤ 栄養バランスはわり度</p> <p>⑥ おいしくおいしく</p>

発問3 どの班の案が、「ふるさと雑煮献立」にふさわしいですか。

A Kさんは、ハウレンソウを子どものように育てていらっしゃることを5の2のみんなは知っているから、それを生かした献立には、私は納得できます。

B ぼくは、▽班のコンセプトの1つは、「風邪ひきの多い冬にぴったり栄養満点」だから、「栄養バランスば

児	っちり度」だけでなく、「旬を意識した度も★4つでよいと思います。
C 児	私は、◇班の、根菜類を全て星型にする案は、食べる人も大喜びだと思います。しかし、調理員さんの手間は相当なものですよね。ハウレンソウ農家のKさんのように、作る人のことも考えないといけないはずです。
D 児	私は、○班の案は、「思いや願いを伝える度」が★4つになっているのが、気がかりです。給食を食べるだけで、ぼくたちや生産者の思いや願いは伝わるのでしょうか。

私たちは、私たちの案を実現させ、目的を達成するには、クラスみんなに納得させるだけでなく、3つの壁があると考えました。まず、1つめの壁は、学校栄養職員の貞弘先生です。「調理員さんたちの作業が大変ではないか」「決められた時間内にできないといけない」「味の組み合わせも大切」という条件も、この前の話の中で出されましたよね。

2つめの壁は、調理員さんたちです。これは、貞弘先生の条件とほぼ同じだと思います。

3つめの壁は、食べてくれる人たちです。ここが、1番難しいのではないかと私たちは考えました。「下松市をもっと好きになってほしい」「下松市を誇りに思ってもらいたい」という目的を達成するために必要なことについてまでも、考えないといけないのではないかと考えました。

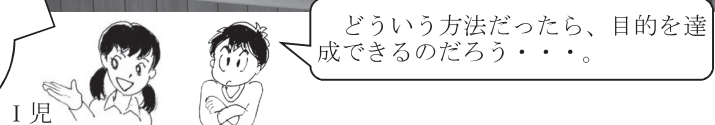


図11 語り合う過程による教師の発問と子どもの語り合いの様相

語り合いの前半部のプレゼンテーションでは、各班1分30秒のアピールタイムを設定し、案に込めた思いや願い、案の特徴について説明させ、「ふるさと雑煮献立」に対する共通点や相違点に着目できるようにした。そして、後半部の検討場面においては、「下松市らしさ」「生産者の思いや願いを伝える」「食べる人を引きつける」「旬を意識する」「栄養バランス」という6つの検討の視点や、「食べる人の下松の『食』に対する見方・考え方、行為を変えたい」という目的に照らし合わせて、各班の案を検討させ、自分たちの案の主張点を再確認したり、不足している視点を見いだしたりできるようにした。また、給食に携わる人々の立場に寄り添った考えや、意図の伝わり方に着目した考えを取り上げ、目的と方法のズレに気付くことができるようにした。図11のI児の発言は、目的を成し遂げるためには、多様な立場や状況に置かれた人々に納得してもらわないといけないことや、給食の献立のみを考えたのでは、自分たちの目的を達成することは難しいことについて気付き、他の子どもたちにも乗り越えなくてはならない「現実」への気付きを促すものになった。その後、子どもたちは、どのような活動を付け足していけばよいかについても語り合い始めた。

図12は、振り返りの過程における教師の発問や子どもの振り返りカードの記述の抜粋である。

発問4 どの案がふさわしいと考えましたか。どんなことを大切に、案を見つめ直したり、決定したりしたいですか。	
K 児	<ul style="list-style-type: none"> 今の時点では、私の班と□班の案がふさわしい。 <決め手> メニュー名に「思いや願い」が凝縮されている。 <改善の方向性> 食育シスターズさんのように教室を訪問したらどうか。
L 児	<ul style="list-style-type: none"> 今の時点では、ぼくたちの班の案は、調理員さんのことを考えていないから、見直しが必要。 <改善の方向性> 星型にこだわりすぎていたので、調理員さんにインタビューして、他の方法で「下松市らしさ」を出したい。

図12 振り返りの過程における教師の発問や子どもの振り返りカードの記述の抜粋

子どもたちの記述から、「ふるさと給食」を実現、成功させるために、自分たちの意図を納得してもらおう立場の人々や、自分たちの「思いや願い」の届け方を意識して、改善の方向性を見いだすことができたかどうか、見取っていった。

(4) 本時の成果

子どもたちは、調理員や学校栄養職員が、特別給食の際に、いつもの献立紹介の放送だけでなく、教室を訪問したり、食材やそれにかかわる資料等を展示したりして、子どもたちに、食材や食文化に興味・関心をもったり、「食」の大切さについて、楽しく分かりやすく伝えていく意味を再認識していった。そして、自

分たちの目的は、給食を企画するだけではないことを再認識し、目的を達成するための具体的な方法を模索する必要性に気付いていくことができた。

2-4-4 「ふるさと給食」の実施

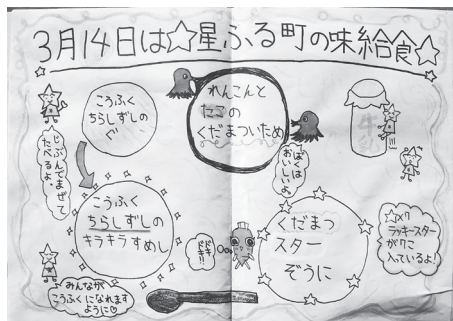
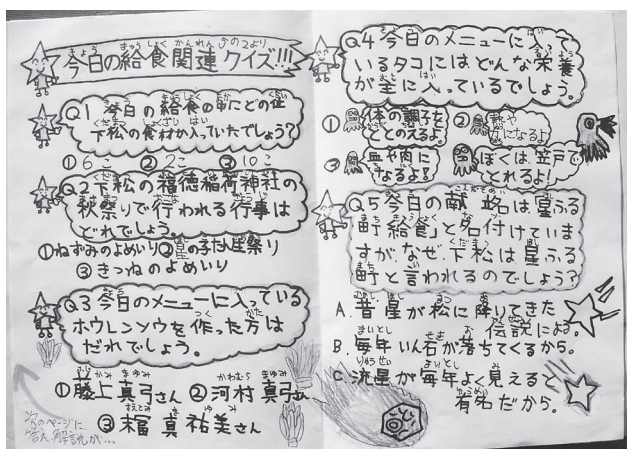


図13 給食時に配布した冊子と実際の給食

子どもたちは検討を続け、「食」に携わる方々に支えられながら、3月14日に5の2プロデュースの「ふるさと給食」を実施できた。子どもたちが、「食べる人の下松の『食』に対する見方・考え方、行為を変えたい」という目的を達成するために考えた方法は、「メニュー名と配膳の仕方、用いた食材等に関するクイズを掲載した冊子を全クラスに配布する」「給食の放送時間に、献立に込めた『思いや願い』、生産者の『思いや願い』について伝える」、「食育シスターズ（給食に携わる人々）のように、低学年の教室を訪問して、献立に関するクイズや話等を行う」であった。これらの仕事は、一人ひとりの持ち味に応じて役割分担して行った。

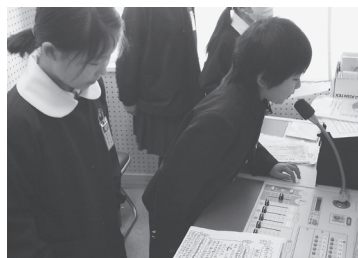


図14 放送で伝える子ども

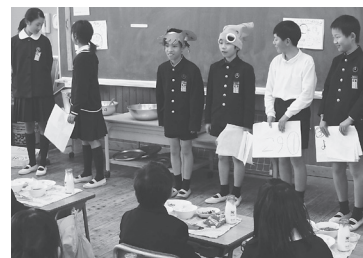


図15 低学年の教室訪問

おわりに

どのような言語活動を設定する場合でも、自分の思いや願い、見方・考え方を「見える化」させた。そうすることができるようになると、子どもは、自分の思いや願い、見方・考え方を自分自身で把握できるようになるだけでなく、共に学び合う仲間にもそれらが伝わりやすくなっていく。そうすると、総合的な学習の時間で求められている「協同的な学び」も意味や価値のあるものになり、共に未来を切り拓いていく仲間である意識も高まっていく。教師にとっても、子どもたち一人ひとりが、自分の思いや願い、見方・考え方の「見える化」を図っていくことができるようになると、子どもの考えや行為の背景にあるものを把握しやすくなる。そのため、子どもの学びのために行っていくべき手立てが見えてくるようになった。

総合的な学習の時間だけでなく、各教科等の課題解決場面でも同様だと考えるが、子どもがこれまで身に付けてきた視点や追求方法、考え等の中から、課題解決にふさわしいものを選び、活用できるようになって

いくことが求められる。そのためにも、子どもたちに、多様な視点や追求方法、考えをしっかりと身に付けさせる手立てを考えたい。

図16と図17のI児とJ児のプロジェクト振り返りカードの記述を見ると、仲間と共に1つのプロジェクトを実行に移す難しさと楽しさを実感したことが分かる。5の2としての案を絞り込み、大人を巻き込むために、まず、乗り越えていかねばならない「現実」は、仲間と折り合いを付けることである。「折り合い」というと、「諦め」のニュアンスを感じるかもしれないが、ここでいう「折り合い」は前向きな「折り合い」である。5の2のみんなが「これで行くのだ」と意志をもてる着地点を見いだすことである。子どもたちは、I児やJ児のように未来を切り拓くための「協同的な学び」に必要な視点や方法等も見いだしていった。

納得しかけたり、折り合いが付きかけたりしていることに対して、「視点の偏りが無いか」「もっとふさわしい考えはないか」「～という立場から見たら」等と、自らの決断や考えについて見つめざるを得ない状況にすることで、真に納得できる「自分なりの応え」を導き出すことができるであろう。このような学びを繰り返すことで、子ども一人ひとりが、生き抜く術を身に付けていく。

注

- 1) 2014年3月まで、筆者は、山口県下松市立公集小学校に教諭として勤務する。この実践は、第5学年担任時に、2年次フォローアップ研修、下松市立公集小学校校内研修でも、公開したものである。また、下松市研究所員集会における研究主題とも関連付けて、実践したものである。

引用・参考文献

下松市教育研究所, 下松市小・中学校教職員研修会: 「平成23年度下松市教育研究年報第42集」, pp. 62-63.
 都留寛・藤上真弓: 「プロ教師に学ぶ総合的な学習の時間授業の基礎技術」, 東洋館出版社, 2012.

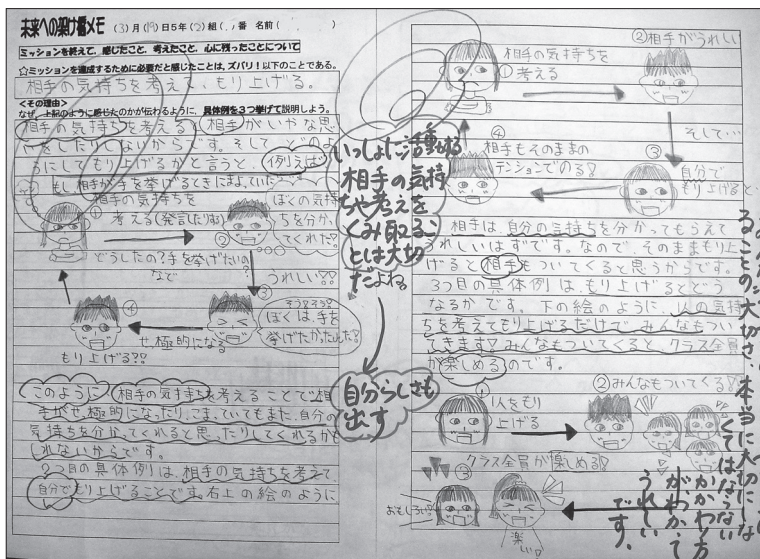


図16 I児の振り返りカード

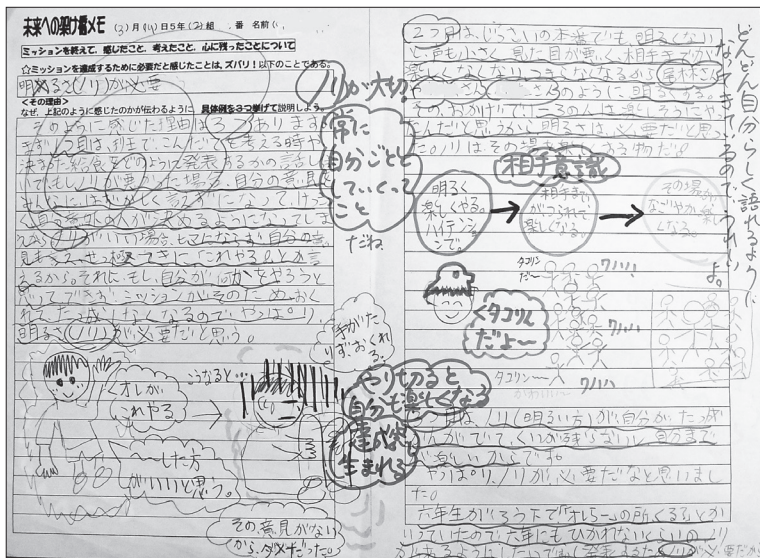


図17 J児の振り返りカード